

令和7年度 学校教育自己診断(保護者) 考察

過去3年間の平均と比べて、特に顕著に変化した項目

特になし

3ヶ年以上、高水位で推移している項目

- 八尾高校は、いじめについて子どもが困っていることがあれば真剣に対応してくれる
学校が**組織的な対応体制**を整え、迅速かつ丁寧な対応を行っていることが保護者にも認識されていると考えられる。今後も情報共有と対応の透明性を維持し、信頼をさらに高める必要がある。
- 子どもは、文化祭・体育祭等の学校行事から多くのことを学んでいる
行事を生徒主体で運営していることが大きな意味を持ち、主体性や協働性を育む機会となっている。失敗も含めて学びの場となり、結果として生徒の満足度が高いことが保護者の評価にも反映されていると考えられる。
- 八尾高校と大阪教育大学の連携（「教師にまっすぐ」を含む）は良いことである
国公立大学との連携は本校の強みであり、**教育系進路希望者にとって魅力的**な機会となっている。今後は、**理系生徒も選択できるような連携拡充**を検討することで、より多様な進路希望に応えられる体制を整えることが期待される。新アドバンス教育コースの展開に大きな期待が寄せられる。

3ヶ年以上、低水位で推移している項目

- 子どもは、家庭学習に積極的に取り組んでいる
特に1・2年生で顕著であり、受験期の3年生を除くと学習習慣が十分に形成されていないことが読み取れる。過去の将来構想委員会の調査では、**部活動加入の有無による学習時間の差がない**ことが示されており、**部活動の負担そのものよりも、まずはスマートフォン依存など学習時間を奪う要因に目を向ける**必要がある。改善策としては、家庭ではスマートフォンの使用に関する注意喚起を行い、学校では「**勉強したくなるきっかけ**」を提供することが考えられる。具体的には、学習時間の可視化やクラス内順位が確認できる無料アプリの導入、スタディサプリなどICTを活用したモチベーション喚起策が有効である。